

(※810-6)

【解説】

甚四郎から富三郎への手紙で、明治二十六年以降のものともみられます。両面二枚組の手紙ですが、ここでは二枚目の手紙に注目します。

まず、敬三郎は猪川清太郎から「ゑい学」(英語)を習え、とあります。紀三井寺村の清太郎は学問に秀でた人物で、甚四郎より先に渡米しており、明治二十六年六月に帰国していました。

次男敬三郎に英語を習わせる理由はアメリカ

へ呼ぶためです。事前に英語を覚えさせることで、英語が話せて評判の本田鶴之助のように働かせることを企図していただのでしょう。

三男定四郎は徳義社（徳義中学）へ入らせて、素質があれば学問をさせるよう頼んでいます。

長男敏郎に対しては、アメリカでの生活環境など次のように述べています。

アメリカでは普通に生活していると金がなくなるので、金を残す人は儉約して質素な食事をする。冬は五か月ほど雨がちちで濡れながら働かなけ

れば稼げず、二三日も雨に濡れると着るものにも困る。日本でも金はたくさん稼げる。アメリカでの「しんぼお」(辛抱)は大変で、アメリカへ来た人は皆後悔する。アメリカへ来ることを思えば日本で我慢して働けば金は稼げる。

以上のことを敏郎に伝えてほしい、と書いてあります。敏郎はアメリカへ行きたかったようですが、甚四郎は許しませんでした。